

# JETプログラム経験者の母国での活躍 国際交流員(CIR)のより効果的な活用

今年度で28年目を迎えるJETプログラム（「語学指導等を行う外国青年招致事業」The Japan Exchange and Teaching Programme）は、世界各国の外国青年を招致し、自治体において任用することで、外国語教育の充実や地域レベルでの国際交流を推進する事業である。

クリアでは、総務省、外務省、文部科学省と連携し、JETプログラムを推進している。

JETプログラムの参加者は、外国語指導助手（ALT：Assistant Language Teacher）、国際交流員（CIR：Coordinator for International Relations）やスポーツ国際交流員（SEA：Sports Exchange Advisor）として全国の自治体で活躍し、地域の国際化に貢献しているが、自治体での任期終了後もその経験を活かし、母国でキャリアを伸ばすとともに、草の根の国際交流を進めることによりJETプログラム全体の価値向上に貢献している。

また、昨今の自治体の国際化施策の多様化に伴い、地域と世界をつなぐ役割を期待されるなど、CIRの活用の可能性はさらに広がっている。

今回の特集では、JETプログラム経験者の母国での活躍の事例を紹介するとともに、国際交流員（CIR）のより効果的な活用について、先に行われた自治体担当者とCIRとの意見交換会の様子を報告する。

## JET参加者の職種

### 外国語指導助手

（ALT：Assistant Language Teacher）  
小学校・中学校や高等学校で語学指導に従事

### 国際交流員

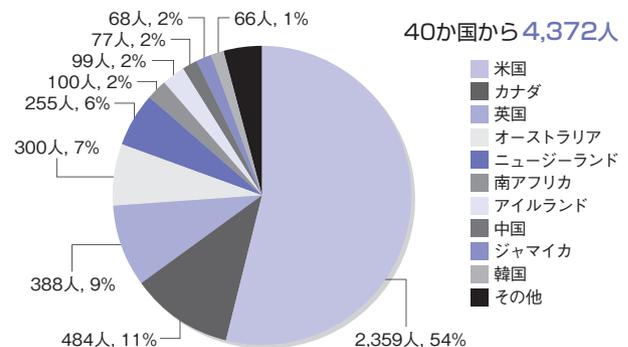
（CIR：Coordinator for International Relations）  
地域において国際交流活動に従事

### スポーツ国際交流員

（SEA：Sports Exchange Advisor）  
地域においてスポーツを通じた国際交流活動に従事

## 現在のJETプログラム参加者数

国別の参加者数（2013年7月1日時点）



## これまでの参加者数の累計

（地域別・主な国別）

（2013年7月現在の概数）

<b>北米</b>	約37,500人	<b>アジア、オセアニア</b>	約8,300人
米国	29,300人	オーストラリア	3,700人
カナダ	8,200人	ニュージーランド	2,700人
<b>ヨーロッパ</b>	約12,000人	中国	1,100人
英国	9,900人	韓国	380人
アイルランド	1,000人	シンガポール	240人
ドイツ	260人	<b>アフリカ</b>	約470人
フランス	250人	南アフリカ	460人
<b>中南米</b>	約440人	ジャマイカ	210人
ブラジル	100人	ブラジル	100人

63か国から  
58,000人を超える参加者

# 1 JETプログラム経験者の母国での活躍

## 1-1 教育分野での活躍事例

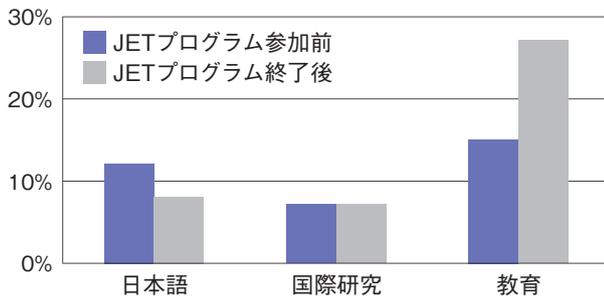
(一財)自治体国際化協会JETプログラム事業部

JETプログラム参加者の大多数を占めるALTには、その学校現場での経験を通じ、任期終了時には自身の将来のキャリアとして、教育分野への関心の高まりがみられる。

JETプログラム参加者による自主的な互助組織であるAJET (The Association for Japan Exchange and Teaching) が行ったJETプログラム参加者へのアンケートにより、JETプログラムがどのように参加者のキャリアに影響するかということについて、興味深い回答が得られた。

具体的には、JETプログラム終了後に教育分野に携わりたいと考えている参加者は回答者の27%であり、JETプログラム参加以前の割合（回答者の14%）に比べ目立って伸びていることがわかった（下グラフ参照）。

JET参加者のJETプログラム前後の希望の職種や研究分野



JETプログラムの経験者が、母国などで教育分野の道に進み、多くの青少年と接するようになることは、草の根レベルで日本や日本の地域への理解、関心を広げる上で好ましいことである。

そこで、今回は、教育分野での活躍事例として、兵庫県のALTとして勤務した後、母国である英国で日本語教師となり、優れた教員の功績を讃える「Teaching Awards 2013」を受賞するなど、目ざましい活躍をしているクリスピン・チェンバース氏を紹介する。

### クリスピン・チェンバース氏 (英) の「Teaching Awards 2013」受賞における経緯

2013年10月、英国の優れた教員を表彰するTeaching Awardsの表彰セレモニーが行われ、英国デボン州にあるタビストックカレッジ（中等教育学校）の日本語教師、クリスピン・チェンバース氏が、中等教育学校最優秀教師賞を受賞した。

Teaching Awardsとは、優れた教員の功績を讃えることを目的として、英国の大手教育企業のPearson PLCにより1998年に設立され、英国教育省なども後援している。

同賞は「英国の教育界のアカデミー賞」とも称される大規模な賞であり、2013年度は全英国の校長、教師などの中から選ばれた教育者が10部門の賞に推薦された。

同氏は、JETプログラムの前身であるBritish English Teachers Programmeに参加し、1986年から2年間、兵庫県立洲本高等学校でALTとして勤務。1988年から1年間、クレアの職員として勤務した。



クリスピン・チェンバース氏

その後、大学院で本格的に日本語を学び、教員資格を取得し、1996年からタビストックカレッジの日本語教師として教壇に立った。

さらに、2002年より東京都江戸川区の高校と相互交流プログラムを実施、これまでに約440人の両校の学生（英国から日本へ約240人、日本から英国へ約200人）が同プログラムに参加するなど日英の草の根交流に貢献している。

同氏の受賞はこれらの功績が評価されたものである。



チームティーチングで使えるトレーニング方法を指導するチェンバース氏

## 2013年度外国語指導助手 (ALT) 指導力向上研修の様子

2014年2月19日、クリスピン・チェンバース氏がALTとして勤務していた兵庫県立洲本高等学校にて、同氏を講師として外国語指導助手 (ALT) 指導力向上研修が開催された。

研修において同氏は、洲本地区の英語科教員やALTに対して、外国語としての日本語を教えるにあたっての経験や工夫していることについて説明した。

具体的にはA3のカードに単語や文を書き、ペアで背中合わせに立ってから、同時に振り向いてカードを見せ合って、いかに速く読めるかを競わせるトレーニング方法を紹介した。

同氏によれば、生徒に日本語（外国語）を教えるにあたり、学ぶ目的を明確にさせているとのことである。外国語を学ぶことそのものが目的では、学習効果が上がらないとのことであった。

また、授業では失敗を恐れないようにさせており、間違っても良いから、大きな声ではっきりと発音させることが大事であると伝えた。

同氏は、自分がALTであったときにお世話になった日本人教師から、生徒への接し方や礼儀を学んだことが、現在とても役に立っているため、現在のALTもよく学んで欲しいと話した。

参加した教員やALTからは、多くの質問が出され、指導方法などについて、盛んな議論が交わされた。

そして、JETプログラム参加者には、将来是非日本語教師になって欲しいと述べた。

## CLAIRの新たな取り組み

1

クレアでは、JETプログラム参加者を任用する団体、つまり自治体が主役であると考えています。

このため、クレア職員は離島・山間地を含めできるだけ多くの任用団体を訪問し、任用団体のニーズを伺い、「自治体の役に立つJETプログラム」を目指して、事業の充実改善を行います。

具体的には、公務員としての心構えを持たせ、生徒や日本人教員とのコミュニケーション能力を向上させるなど自治体の求める人材の育成のため、オリエンテーション・研修の充実を図ります。

## クリスピン・チェンバース氏へのインタビュー ～①JETの経験が自分のキャリア形成に与えた影響～

Q 日本や教育に関心を持ったきっかけは？

JETプログラムを利用して日本に来るまで、日本語はまったく学んではいなかった。父が美術の教師で習字を行っていたのを見て、意味はまったくわからなかったが、書かれた漢字をととても美しいと感じてはいた。

そんな父の影響を受け、JETプログラムに参加する前から「教育」への関心はあったが、ALTを経験してその思いはさらに強くなった。

**Q 洲本高校での思い出は？**

JETプログラムを希望したときに、日本の文化により多く接するためには、都会ではなく、田舎が良いと考えたことから、田舎に住みたいと希望した。

兵庫県淡路島の洲本市に着任して、先生方、生徒、地域の人々と触れ合い、大変良くしていただいた。先生のお子さんたちと一緒に遊んだり、大阪大学でクリケットチームを作って活動したり、洲本市の周りがある山を洲本高校の陸上部の生徒たちと走ったり、楽しい思い出がいっぱいだ。

**Q 英国で日本語を教えることにした理由は？**

日本に来て、初めは日本語が全くわからなかったが、少しずつ覚えていく過程で、日本語・日本文化の素晴らしさを知った。

大変お世話になった日本の人々への感謝の気持ちから、日本のこと、つまり日本語を英国で伝えていきたいと考えた。

洲本市に行ったからこそ、日本語教師になったのかもしれない。洲本高校の先生や生徒、地域の方々のお陰だと思っている。

そして、JETプログラムを終え、大学院で日本語教師の免許を取得し、英国の中等学校の教員になった。

**Q 日本語教育を始めるにあたって大変だったことは？**

当時、英国の中等学校では、外国語として学ぶことができたのは、フランス語、スペイン語、ドイツ語の3か国語のみだった。この3か国語に加えて、日本語を教えていきたいと考えたが、校長やほかの教員からなかなか理解されず、大変苦労した。

何とか校長を説得し、18年前にタビストックカレッジで日本語科を作り、日本語教育を始めた。

それは、11歳（7年生）300人、週2回の授業からのスタートだった。それから、地域や保護者の理解を得るため、両親のための「大人の日本語コース」を開講したり、PTAへ日本語学習についての説明も行った。

しかし、「なぜ日本語なんだ？」という声が大きく、最初の5年間はとても大変だった。次第に日本語を学ぶ生徒が増えていったが、優秀な生徒が日本語に流れてしまったことで、フランス語やスペイン語の教師からのバッシングが激しかった。

**クリスピン・チェンバース氏へのインタビュー  
～②英国の子どもたちに日本語を教えることへの意義や思い～**

**Q 日本語教育において、工夫した点は？**

特に工夫したのが、日本語を易しそうに見せることだった。そうすることで自信を持たせることができる。難しいと思わせてしまうと、生徒は挫折してしまう。

このことがTeaching Awardsで評価されたことの一つだと思う。

**Q 日本語教育における現状の問題点は？**

タビストックカレッジで日本語を学んだ生徒にとって、大学の日本語コースは簡単過ぎるといわれている。日本語を学びたいという学生が増えていることもあって、大学での日本語コースの改善が必要だと思われる。

日本語の普及には、日本語の教師の数を増やす必要がある。しかし、日本語の教師がとても少なく、足りない状況だ。

JETプログラム経験者などが、日本語の教師として、タビストックカレッジで1年間訓練を積みながら授業を行った後、ほかの学校で日本語コースを作って独り立ちしている。それでも、まだまだ日本語教師が不足している。

**Q 日本語教育は何歳ぐらいから始めるべきか？**

日本語教育は、小学校から始めるのが良いと考えている。

両親も含めての教育・交流が必要だと思う。タビストックには国立公園があり、とても自然に恵まれたところなので、こうしたところでホームステイして、日本人との交流ができれば素晴らしい。

**Q 日本語教育において、気を付けている点は？**

日本語教育で気を付けていることは、授業の前に目的を生徒に明確にするようにしていることだ。

「何を目的に、なぜ日本語を勉強するのか？」を生徒に聞いている。「試験のため」以外の目的を持たせる必要がある。日本語そのものを学ぶことが目的では駄目だと考えている。

授業を始める前に、私が「今日は形容詞の授業をやります」と言ったら、生徒が「今日は、形容詞ではなく、日本文化について興味があるからそ

の勉強をしたい」と言い出した。

こういった場合に、私は「じゃあ、今日は日本文化をやろう。でも明日は必ず形容詞をやるけどいいね」と言い、生徒も「わかった、やる」と言って納得した。生徒を納得させることが大事だと、私は考えている。

**Q 日本に対して興味を持たせることが必要なのですね？**

日本の文化や生活、食事、ビジネスなど興味を持たせることで、日本人とコミュニケーションをしなくなり、日本語の学習につながる。

タビストックにある国立公園での牧場や乗馬などについて、日英で交流をして行けば、日本語学習が進むと思う。

**Q 日本語教育の意義は？**

将来に渡って、日本と英国が交流して行くために、青少年を中心に多くの英国人が日本語を学ぶことは大変重要だ。

日本語を学んだ子どもたちが将来JETプログラムに参加し、帰国した後に私のように日本や日本語のことを次の世代に伝えていくようになれば素晴らしい。

日本と英国の架け橋となる人材を育てることに一番の意義があると考えている。

**クリスピン・チェンバース氏へのインタビュー  
～③これから来日するJETプログラム参加  
予定者やJETプログラムに期待すること～**

**Q これからのJETプログラム参加者に望むことは？**

これからのJETプログラム参加予定者の皆さんには、日本の文化、人、言葉、生活にできるだけ多く触れて、日本を好きになって欲しいと思う。

そして、是非日本語の教師になって、母国に帰ってから、日本を知らない人たちに、日本のことを広めて欲しい。また、できるだけ細かく、いつまでも長期間にわたって、伝えるようにして欲しい。

それから、できれば伝えるだけでなく、直接、行き来しての交流をしてもらいたい。例えば、もし日本語教師になったとしたら、自分が働いていた日本の学校と母国の学校が交流できるよう、努

力して欲しい。

**Q 最後に、チェンバースさんの夢を聞かせてください。**

現在、大学生のためのホームステイは用意されているが、小・中学生のためのホームステイがあまりない。

私の「これからの夢」は、小・中学生がお互いに交流できる「仲人（なこうど）」になることだ。

クリスピン・チェンバース氏はそう夢を語った。

**CLAIRの新たな取り組み ②**

JETプログラムの任期の終了を控える参加者に対して、今後のキャリア育成や国際交流への貢献につながる情報提供を行うため終了前研修会を開催しています。

今年2月に開催した研修会では新たに、日本をはじめ各国の商工会議所などの協力を得て、企業関係者の方々にJET参加者が話を聞く機会を設けるとともに、参加者が将来にわたって日本と関わっていくために、日本の魅力や政策を伝えるDVDなど官民の広報リソースを手渡しました。

**ティーブレイク**

クレアは全国の自治体から派遣される職員が大部分を占めております。

このため、地方の訛り(!?)だけでなく、仕事の進め方でも戸惑いを感じる事が少なくありませんが、全国津々浦々の自治体から来ているからこそ、常に新しい視点で業務を見ることができ、新しい風を吹き込むことができます。

クレアはこれからも自治体の皆さんに寄り添った、自治体のためになる組織を目指します。

## 1-2 JETプログラム同窓会 (JETAA) を通した活動事例

### (一財)自治体国際化協会JETプログラム事業部

次に、個々のキャリアとは別にJETプログラムを終了した参加者の活躍の場として、その同窓会組織であるJETAA (JET Alumni Association) の活動を紹介したい。

JETAAは1989年に設立された親睦団体で、日本とJETプログラムに参加している諸国との相互理解を深めることを目的として活動をしている。

現在、JETAAの活動は15の国と地域にわたり、支部数は52支部、会員数は24,000人以上となっている。

JETAAの主な活動は、日本関連団体や自治体との連携維持（日本と世界との架橋の役割）、日本や日本文化を紹介するイベントの開催、在外公館が行うJETプログラム参加者の募集・広報活動への協力、帰国するJETへの就職支援、会員相互の情報交換など多岐にわたる。

#### JETAA (JET同窓会) 主な国別の会員数

(2013年12月現在の概数)

国	会員数	国	会員数
米 国	約11,600人	ニュージーランド	約870人
英 国	約5,100人	アイルランド	約410人
カナダ	約2,400人	韓 国	約280人
オーストラリア	約1,700人	ドイツ	約260人
日 本	約1,300人	フランス	約130人

15か国 52支部 約24,000人

### JETAA北カリフォルニア支部の活動紹介 JETAANC代表：マーク・フレイ

北カリフォルニアで日米交流を牽引するJETAA NCの代表、マーク・フレイです。(mark.frey@jetaanc.org)

皆さんが、自治体または学校関係の方であればJETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）の参加者を知っているでしょう。あなたの同僚や友人かもしれません。

しかし、彼らが母国に帰ってからの様子はご存知でしょうか？

そこで、元JETプログラム参加者が日米交流のために行っている活動をいくつか紹介したいと思います。

#### 【JETAANC】

JETプログラムの開始から2年たった1989年に、元JETプログラム参加者が集まり、お互いにサポートし、草の根の国際交流を促進するなど、JETプログラムの使命を継続することを目的に、JETプログラム同窓会 (JETAA) を設立しました。

過去25年の間、JETAAは活気に満ちた世界的な組織に成長しました。

元JETプログラム参加者が、世界中で日本を紹介することを通して、どんなに素晴らしい影響をもたらしているかわかりと思います。

今年、私はJETAAの北カリフォルニア支部、JETAANCの代表になりました。約3千人の会員を擁して、JETAANCは、世界で最大かつ最も活発な支部の1つであるということを誇りに思っています。

元JET参加者は、営利、非営利、教育、行政など、地域社会のさまざまな分野のあらゆるレベルで働いています。いつでもどこでも、できる限り、日本と米国の交流を推進しています。

毎年、支部の会員は、JETプログラムに多くのサポートを提供しています。日本の在外公館が行うJETプログラム参加者の募集や選考、研修を手伝っています。また、北カリフォルニアに帰った際、アメリカの生活に復帰し、雇用の場を見つけることをサポートしています。日本関連企業に就職する元JETプログラム参加者が少なくありません。

#### 【キャリア支援】

JETプログラム経験者のキャリア支援の分野では、JETAANCは在サンフランシスコ日本国総領事館の経済班、北加日本商工会議所、シリコンバレーと結び付いている地元の日米ビジネスネットワークワーキング組織である経済ソサエティなどと強力

なパートナーシップを築いています。

また、独自のキャリアネットワーキングイベントを開催し、元JETプログラム参加者とネットワーキングができるよう、そこに地元の日本関連企業・団体を招待しています。

### 【日米文化交流】

日米の文化交流も積極的に推進しています。「歌舞伎クラブ」を設立し、日本の舞台芸術についてのセミナーを無料で提供しています。



「歌舞伎クラブ」の様子

最近では、クラブで忠臣蔵に関する1年間のレクチャーコースを提供しました。また、有名な地元のアーティストである梶原ジュディス氏に「黒塚」という新たな舞踏ダンス作品を作っていただきました。さらに、英語による最大の日本の舞台芸術に関するオンラインリストを作りました。世界各国からの参加者を誇る日本の舞台芸術を中心とした、最初で唯一のオンライン英語のディスカッション・フォーラムも開発しました。詳細については、<[jetaanc.org/kabuki](http://jetaanc.org/kabuki)>をご覧ください。



ビジット・ジャパン・サンフランシスコの様子

日本文学への理解を促進するための読書会も行っています。また、花見、忘年会、新年会など年間を通して日本の伝統に則したイベントを開催しています。さらにジャパンエキスポ、ビジット・ジャパン、正月の祭りなど、地元の日本関連フェスティバルに出展して、日本やJETプログラムを紹介しています。

### 【ボランティア人材の提供】

北カリフォルニア桜祭り、子どもの日フェスティバル、J-POPフェスティバル、餅つき、お月見、お盆祭りなど、地域の多くの日本関係のお祭りに参加し、ボランティア人材を提供しています。

サンフランシスコ市と大阪市、オークランド市と福岡市を含む地元の姉妹都市に関係するイベントへの参加は特に活発に行っています。



北カリフォルニア桜祭りの様子

地元の日本やアジア文化の発信拠点である北カリフォルニア日本文化コミュニティーセンター、オークランドアジア文化センターが行う多くのイベントを共催し、ボランティア人材を提供することを通して、日本社会との強力なパートナーシップを築いてきました。

ほかに、大学で日本を研究することを予定している地元の高校生に対して、奨学金を毎年支給しています。

### 【日米交流の広報活動】

JETAANCは、地元の日米交流に関する広報活動に大きな役割を果たしています。ソーシャルメディアを活用して、積極的に地元の日本関連のニュースやイベントを広報しています。日本関連

団体、レストラン、店舗、庭園や温泉など、北カリフォルニアの日本に関する最初の、そして最も包括的と自負しているオンラインリストを作りました。地域の人々に、日本とつながるためのリストとして活用してもらっています。

また、地域で活動している60以上の日本関連組織が互いに連絡を取れる場として、オンラインフォーラムを設立しました。

今後の目標の1つは、三味線、琴、尺八、太鼓など日本の伝統的な楽器を演奏する才能を持った元JET参加者と地域住民を集めて、邦楽を演奏するバンドを結成することです。また、日本文化を学生に紹介するために地元の学校を訪問したいと思っています。

こちらの活動に対して報酬はいただきません。そのすべてがボランティア活動です。日本を愛し、日本を世界に紹介したいので、活動しています。

それは日本に住んでいたときに我々が受け取ったことを、日本に「お返し」することができる方法なのです。

### 【東日本大震災への支援】

我々がこうした気持ちを持っていることは、2011年3月11日に東日本大震災が起こったときに証明されました。世界各地の元JETプログラム参加者のコミュニティーはすぐに日本を支援するために立ち上がりました。発生後数週間以内に、JETAANCは復興支援のための17,000ドル以上の資金調達をしました。

全米レベルでは、元JETプログラム参加者は、学生など教育関連サポートに関する復旧プロジェ



東北のための募金活動

クトのため、約90,000ドルの救援基金を集めました。全世界レベルでは、元JETプログラム参加者は復旧作業を支援するため、500,000ドル以上を集めました。

また、多くの元JETプログラム参加者が、復旧を支援するために東北を訪れました。

東日本大震災後3年の節目に、JETAANCは東北の学生や家族の継続的なニーズを満たすテイラー・アンダーソン追悼基金のため募金活動を行い、6,000ドルを集めました。全米で元JETプログラム参加者はこの基金のために約50,000ドルを集めました。<[bit.ly/tamfund](http://bit.ly/tamfund)>

### 【JETAAの活用方法】

元JETプログラム参加者は、日本の学校や自治体にとっての大きな利用可能性を秘めた資源であると考えています。元JETプログラム参加者とながら最良の方法は、あなたの都道府県別のJETプログラムに参加者した元JETプログラム参加者が登録している「LinkedIn」のグループに登録することです。<[bit.ly/jetaaken](http://bit.ly/jetaaken)>

元JETプログラム参加者をどのように役立てることができるかについて、創造的に考えることをお勧めします。

例えば、次のようなことも考えられるのではないのでしょうか。

- ・学生と元JETプログラム参加者との間で、手紙やビデオの交換を計画する
- ・元JETプログラム参加者と学生との間のライブビデオチャットを計画する
- ・教室で使用できる文化的資料を送付してもらうように元JETプログラム参加者に頼む
- ・あなたの市町村および都道府県の広報をしてもらうように元JETプログラム参加者に頼む
- ・英語力を向上させるため、元JETプログラム参加者と職員の間で語学交流を始める
- ・学生のためのホームステイを元JETプログラム参加者に頼む

JETAANCとJETAAについて、さらに詳しく知るには、<[jetaanc.org](http://jetaanc.org)>、<[jetaausa.com](http://jetaausa.com)>、<[JETwit.com](http://JETwit.com)>をご覧ください。

## JETAA西オーストラリア支部の活動紹介 JETAAWA代表：デイビット・ミリン

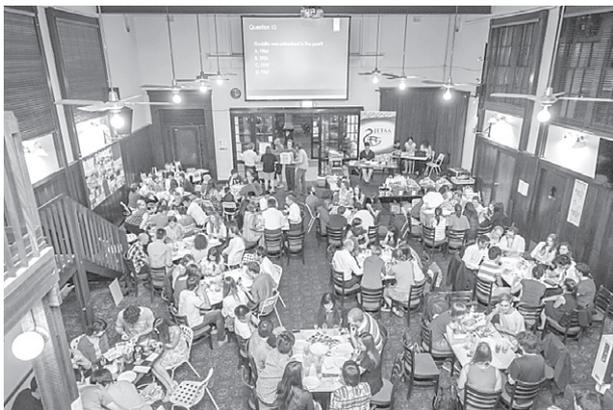
西オーストラリアのJETプログラム同窓会、略称JETAAWAは29人の役員を含む450人以上のメンバーを持つ活発なグループです。

地域におけるさまざまな活動を通じ、地域社会におけるJETプログラムや日本への理解を促進するとともに、西オーストラリアに帰国するJET経験者同士のつながりや支援を行うことを目的としています。また、草の根レベルで、日本とオーストラリアの文化の広範かつ深い理解を醸成することも目指しています。

JETAAWAメンバーが行う活動として、チャリティーイベントの開催、文化交流グループ活動やボランティア活動などがあります。毎年恒例の「クイズナイト」という募金集めのイベント、お好み焼きバーベキュー、キャリアセミナー、「KaiWA」というイベントなどは、年間を通じて行う素晴らしい事業のひとつです。

### 【2014クイズナイト】

2014年3月にJETAA主催で毎年恒例の募金活動イベント「クイズナイト」を開催し、約130人もの熱心な方が集まったことを誇りに思っています。夜を通して、多くの日本に関するトリビアで誰でも賞品を獲得できるチャンスが提供されました。スーパーじゃんけん（勝者がすべてを手にする方式）や日本をテーマにしたプレイ・ドロー（子ども用カラー粘土）製作コンテストや○×クイズは、楽しい夜に花を添えました。



「2014クイズナイト」の様子

毎年、このイベントの収益のすべては慈善団体に寄付されます。今年は1500ドルが「Eyes for Fukushima」という、東北の被災地にいる現役のJET参加者により構成されたボランティア組織に寄付される予定です。

地元の日本とオーストラリアの企業から寄付された多くの景品がイベントの成功に多大なる貢献を与え、大変感謝しています。

### 【お好み焼きバーベキュー】

今年2月に、80人以上の人々がパースにある美しいキングス公園で、お好み焼きファミリーバーベキューに参加し、竹の綱引き「Bohiki」、クリケットやスイカ割りなどを楽しみました。

参加者は、お好み焼きとソーセージなどの日本とオーストラリアの料理を楽しみながら、互いに交流する機会を持ちました。



お好み焼きバーベキューでの「Bohiki」の様子

### CLAIRの新たな取り組み



任用団体のニーズとして、ALTが児童・生徒や教員などとのコミュニケーションをより深くとれることが強く望まれています。そのためのスキルとして、「日本語能力」の向上を目指して、クリアでは、日本語講座（初・中級コース）をオンライン化して、よりコミュニケーション能力を重視した講座内容となるよう計画しています。

## 【2013キャリアセミナー】

JETAAWAが主催する今年で5年目となるキャリアセミナーは、日本から帰国したJET経験者、学生、それから一般住民が、パースにあるさまざまな日本関連業界を知る機会です。

2013年に紹介された業種・分野は、政府関係、翻訳・通訳などがありました。今年からの試みとして、各発表者が10分で自分の業界の概要を説明した後、いくつかの質問に答えました。その後、休憩中やイベントの終わりに飲み物や軽食を楽しみながら、参加者と発表者が交流を深め、情報交換を行いました。



2013キャリアセミナーの様子

## 【kaiWA】

kaiWAは、JETAAWAメンバーにより隔週で開催される日本語交流イベントです。

イベントはリラックスした雰囲気で行われるため、参加者は気軽に会話できます。各イベントに平均50人が参加し、なかには口コミで参加し、常連となった人たちも少なくありません。

そのほかの毎年のJETAAWAイベントとして、出発前の新規JET参加者とのQ&Aセッションのほか、姉妹都市関係イベントにおける通訳、お花見ピクニック、パース日本祭りや世界の食フェアでのかき氷ブースの出店、冬のお祭り、映画の夜間上映会などがあります。

詳しくはウェブサイト ([jetaawa.com](http://jetaawa.com)) をご覧ください。

JETAAWAは現在、3月に選出された新しい役員会において、今後の活動計画を立てています。



お花見ピクニックの様子

アイデアのひとつとして、パースの主要スポットにおいて、日本をテーマとした写真展を行うことを考えています。

また、今年、西オーストラリア州で開催される「シスターシティーズオーストラリア」という地域会議をサポートしたいと考えています。

JETAAWAは、会員が日本や日本社会、JETプログラムに積極的かつ継続的な関心を持ち続ける機会を提供します。

また、メンバー間の結び付きを容易にするための手段を提供しています。イベントの詳細について、また、JETAAWAが年間を通じて開催する素晴らしいイベントを基に新たに企画する際はぜひ気軽にご相談ください。

# 2

## 国際交流員 (CIR) のより効果的な活用

### CIRに関する意見交換会を通して

(一財)自治体国際化協会JETプログラム事業部

今回の特集では、JETプログラムの3つの職種のうち、自治体の国際交流担当部局などで、主に国際交流活動に従事するCIR（「国際交流員」Coordinator for International Relations）に焦点をあてた。

CIRは、任用団体の国際交流関係事務の補助（外国語刊行物の編集・翻訳・監修、国際交流事業の企画・立案および実施にあたっての協力・助言、外国からの訪問客の接遇、イベントの際の通訳など）、任用団体の職員・地域住民への語学指導、地域の国際交流活動への助言・参画、外国人住民の生活支援活動など、地域の国際化を進める上で重要な役割を果たしている。

2013年度は、世界27か国361人のCIRが日本各地で活躍している。

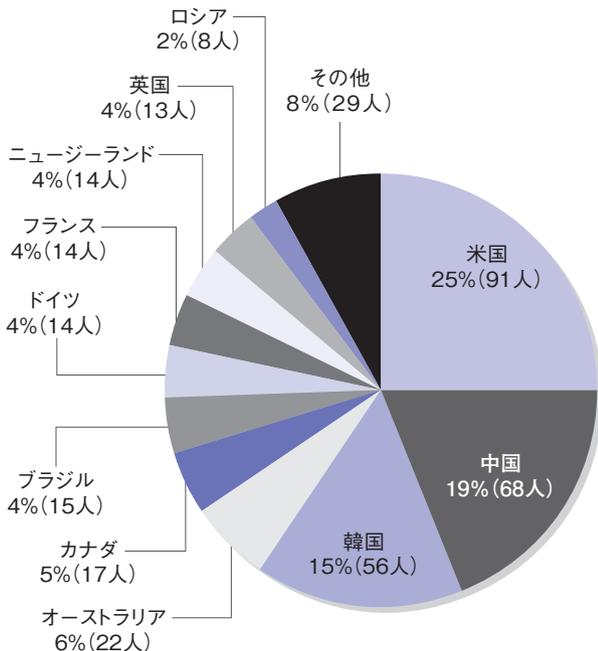
### 都道府県・政令市別CIR配置数 上位10位

(2013年7月1日現在)

順位	都道府県・政令市	人数
1	島根県	20
2	北海道	18
2	石川県	18
4	高知県	16
5	青森県	15
5	長崎県	15
5	鹿児島県	15
8	宮崎県	13
9	秋田県	11
10	富山県	10

### CIR国籍別参加者数

(2013年7月1日現在)



訪日観光客への観光案内の様子

近年、CIRに求められる役割は、従来の翻訳・通訳業務に加え、経済交流や多文化共生の活動の推進にも関わっており、業務が多岐に渡ってきている。その影響からか、自治体においてはCIRを幅広く活用してもらえるよう、国際交流担当課にとどまらず、さまざまな分野の部局に配置しているところもある。

特に近年、観光は力強い経済を取り戻すためのきわめて重要な成長分野であるとの認識の下、インバウンド事業（訪日観光客の誘致事業）に力を入れている自治体が多く、外国人観光客を誘致す

るために、日本の風土・文化に対する日本における実生活で培った豊富な経験を有し、外国人観光客の視点でのアドバイスができるCIRは、自治体にとって無くてはならない存在となっている。

また、多文化共生の観点から、母国語と日本語が堪能なCIRは、地域の外国人住民の支援を行うという重要な役割も担っている。特に、災害時における外国人住民に対する情報伝達やケアは極めて重要な課題となっており、CIRの配置が待たれている。

CIRは日本での活動にとどまらず、JETプログラム終了後においても日本の地域との架け橋となってくれる存在でもあり、姉妹都市の交流を深めたり自治体の海外でのセールスプロモーション活動の援助を行っている。



ニューヨークにて日本文化の紹介イベント



意見交換での通訳の様子

クリアとしては、自治体の皆さんにCIRの活躍の様子をお伝えすると同時に、多様な業務に従事するCIRへの支援を積極的に行っていきたいと考

えている。その一環として、今後のJETプログラムのより良い運営のため、年に数回、JETプログラム事業に関わるさまざまな方との意見交換を実施している。

今年の3月に行われたJETプログラム意見交換会(CIR部会)での様子を以下で紹介する。

## 意見交換会の概要

去る3月14日、2013年度JETプログラム意見交換会(CIR部会)がクリアにて開催された。この意見交換会は、JETプログラムが円滑に運営されるよう率直な意見交換を行うことを目的としており、ALT部会とCIR部会が隔年で開催されている。

また、今回の意見交換会は、初の試みとして、任用団体の担当者にもご参加いただいた。これにより、CIR側と任用団体側双方の率直な意見交換が行われ、お互いが何を考え、何を求めているかということのを再認識できる貴重な場となった。



意見交換会の様子(グループディスカッション)

意見交換会には、現役CIRのほか、任用団体のJET担当者、総務省、外務省、文部科学省、クリア職員が参加した。午前の部では、現役CIR、任用団体のJET担当者、クリア職員がいくつかの小グループに分かれ、次に挙げる4つのテーマに基づき、各自自治体でのそれぞれの経験や課題の解決策について活発な意見交換が行われた。

午後の部では、各小グループにおける意見交換の結果発表を行った後、全体での意見交換が行われた。

## 意見交換会での各テーマにおける 具体的意見など

今回の意見交換会においては、①CIRの役割について、②CIRに求められるスキルについて、③勤務評定について、④JETプログラム終了後におけるJET参加者と自治体との交流について、の4つのテーマを設定した。

### ①CIRの役割について

まず、テーマ①については、任用団体がCIRに担ってもらいたい役割や業務、CIRが業務に対して考えていることなどを明確にすることで、さらなるCIRの有効活用を目指して設定した。

任用団体側からは、翻訳・通訳業務、学校訪問（出前講座）を行って欲しいという意見が多数を占めたが、地域の国際化への貢献、地域と世界をつなぐ役割を期待しているという発言もあった。

CIR側からも同様に、そのような役割が求められていることを念頭に職務に当たっているという発言があったが、昨今の厳しい財政状況を反映して、CIR自身がイベントを企画しても、なかなか予算が付かず実施できないという声も聞かれた。

しかし、予算の無いなかでも、学校や地域住民の方と協力して、「読み聴かせ」などのイベントを実施しているとのことであった。なかには民間企業とタイアップしてイベント開催をしているという意見も出され、さらに工夫の余地があるとの提案がされた。



学校訪問（出前講座）

その発表の中で、任用団体とCIRが協力し工夫して取り組んでいる興味深い事例がいくつかあった。

### 【事例紹介】

#### □島根県松江市・・・インバウンド事業

松江市では、2011年度より、主要産業である『観光』のなかでも特に、訪日観光客の誘致（インバウンド）に力を入れている。

そのようななか、CIRは従来の国際交流業務に加え、自らが日常生活のなかで発見したこの地の魅力を吸収し、自国または母国語の通じる国々に向かって自分の言葉で表現するという地域に密着したプロモーション業務を行うといった、CIRならではの業務を担っている。

また、CIR5人に忍者に扮したモデルとなってもらい『松江城』の観光ポスターを作成した。『松江城』だけをポスターのモチーフにするのではなく、この地を訪れれば体感できる、生活の中に歴史・文化が刻まれている城下町の空気をもポスターの中に閉じ込めようというものである。ポスターのキャッチコピーである『INDULGE IN THE LEGENDS（伝説にどっぷりはまろう!）』もCIRの発案で、ネイティブならではのセンスあるものに仕上がっている。

#### □新潟県・・・視察ツアー

「もっと自ら企画立案する仕事がしたい」との声がCIRからあがり、CIRが企画する新潟県内視察ツアーが催された。

バスを借り切って新潟県内のALT、CIRなどのJET参加者や国際大学の学生、県費留学生とともに、県内の観光地「新潟ふるさと村」「弥彦神社」や酒蔵などを視察するものである。視察ツアー当日も、CIRがツアーの添乗員役となり、現地でガイド通訳を行ったり、スケジュールの管理など、自ら運営を行っている。

新潟県の歴史や文化、生活などに触れることで、県の魅力を再発見してもらうことを目的に実施している。そのほかCIRにとっては、海外からの要人訪問での通訳業務において、新潟県に関する多くの知識を得ることは、非常に大事であると県国

際課でも考えている。この事業は、CIRのスキルアップにも通じる事業といえる。



全体での意見交換

## CLAIRの新たな取り組み 4

JETプログラムの円滑な運営を目指して、意見交換会をALT部会、CIR部会を隔年で実施しています。

これまで、JET参加者と総務省、外務省、文科省、クレアによる意見交換を行ってきましたが、今回、初の試みとして、JETプログラムの一方の主役である「任用団体」の担当者にもご参加いただき、それぞれの考えやほかの自治体の状況を知る機会となるよう実施方法を変更しました。

### ② CIRに求められるスキルについて

テーマ②については、任用団体が求める業務を達成するために必要となるスキルは何か、さらにそのスキルを得るにはどうしたらよいかを意見交換してもらった。

仕事に対する姿勢、時間管理、協調性、異文化への適応能力などスキルだけでなく心構えなども含めさまざまなものが挙げられたが、やはり日本語能力とコミュニケーション能力が特に重要であるといった意見が、CIR側、任用団体側ともに多数を占めた。

コミュニケーション能力については、我々日本人であっても仕事をする上で求められるものであ

り、CIRに限ったことではなく、任用団体、CIR双方が身に付けるべきスキルといえる。さらに、任用団体側からは、職場内での円滑なコミュニケーションがとれていれば、CIR自身の日本における働き方の理解度も深まるのではないかとこの意見もあった。

日本語のテレビ放送（ニュース番組など）を視聴して標準語を学ぶ工夫をしたり、団体の一般職員用研修会に参加して、マナーや文書事務などの研修を行っているという意見も出された。

また、これは次に挙げる「勤務評定」とも関係してくるが、CIR自身のスキルアップのためには、まず任用団体側がCIRに何を担ってもらうかを明確に提示することが重要である。

その上で、CIR自身が目標を定め、達成度について評価され、また改善していく。この繰返しにより、さらなる能力向上が図られるものと思われる。

### ③ 勤務評定について

テーマ③について、クレアでは、CIRと任用団体がコミュニケーションをとり、勤務内容の良いところや改善して欲しいところを明確にしていくことで、業務内容の向上を期待することができると考え、勤務評定実施を推進している。

今回参加した団体のうち約半数が実施しているとのことだが、勤務評定の必要性が今ひとつ理解されていないと感じる場面もあり、今後の改善事項の一つになるであろうと感じた。

上記のテーマ②でも触れたが、勤務評定に関しては、CIR側からは、勤務評定をしてもらうことにより、改善しながら次の仕事を進めていけるといった意見があった。

また、任用団体側の意見として、CIRのモチベーションを下げってしまうのではないかとという慎重な意見が出された一方で、CIR側からは、どのように評価されているか知りたいという意見が強かった。改善を求められたとしても、その改善策を含めた具体的なアドバイスをもらえるのであれば、モチベーションは上がるものだという肯定的な意見も出された。

CIRは皆、勤務評定をして欲しいと考えていることを知ることができた。本人への伝え方が難し

いが、是非勤務評定を実施してみたいとの意見が任用団体担当者から出された。

勤務評定を行うことは、CIRと任用団体間のコミュニケーションを深めるための有効な手段であることはもちろんのこと、再任用する際の根拠となるなど、任用団体にとっても有益なものであることから、勤務評定が誰のために必要であるかということを含め、改めて考える必要があると思われる。

#### ④JETプログラム終了後におけるJET参加者と自治体との交流について

テーマ④では、JET終了後の交流について、それぞれの自治体での事例を出し合った。

海外に県人会が存在する国では、比較的交流が行われており、例えば、自治体の職員が海外において、セールスプロモーションや観光PRを行う際に、元JET参加者がお手伝いをしたり、アポイントメントの支援などを行っているといった事例が紹介された。

また、県のPRを帰国後にしてくれた人に、県産品をプレゼントするという試みを2014年度から実施しようとしているという話も出た。

総じて、任用団体と元JET参加者との交流が途絶えがちであるという共通認識があったため、任用団体側からは、メールマガジンなどによる一方的な情報発信ではなく、元JET参加者に、母国などにおいて広報活動をしてもらうといった工夫をするなど、JETプログラム終了後における交流のあり方について改善していく必要があるとの声もあがり、参加者の多くは、今回の意見交換の中でヒントになるものを見つけたようであった。

座などの改善の参考となり、大変有意義なものになったと考えている。

今後とも、JETプログラムの円滑、かつ実効性のある運営のためにこのような意見交換会を開催できればと考えているところである。

---

### 意見交換会を終えて

---

冒頭にも述べたように、今回の意見交換会には、初の試みとして、現役のCIRに加え、任用団体のJET担当者にもご参加いただいた。これらの担当者の方々にも、他団体での新たな取組事例や考え方、またCIR自身の活動状況や率直な意見を直接聞いていただく機会を提供することができた。主催者である当協会としても、中間研修や日本語講